

リスク回避と後悔回避の垂直伝達に関する調査研究

1220447 岸本遼馬

指導教員 小林豊

研究背景

人はしばしば、真に望んでいるはずの選択肢を選ばずに、妥協を行いリスクの低い行動を行うが、その結果後悔する。個人が有する「リスクを回避したい」傾向や、「後悔をしたくない」と思う度合いは、心理学の既存研究でも明らかになっているように、個人によって異なる心理学的な性向であり、因子分析や、それによって作成された心理尺度を用いた研究が盛んにおこなわれてきた。個人のこういった性向を形作る要因として様々なものがありえるが、そのうち両親からの文化的な影響は無視できない要因であると考えられる。本研究では、人々の意思決定におけるリスク回避性向や後悔を回避する個人の性向は、両親からことなる強さの影響を受けているという仮説を立て、検証するための調査を行う。

目的

親のリスク回避性向は、親の職業や行動に表れやすい一方で、後悔を回避する性質は、職業や行動に表れにくいという前提を置く。そこから、「リスク回避性向は親から子へ継承されやすいが、後悔回避性向は継承されにくい」という仮説が導かれる。本研究では、この仮説をアンケート調査により検証することを狙う。

調査・分析方法

本研究では、高知工科大学生 100 名を対象に、ウェブアンケート調査を実施する。アンケートでは、回答者および両親のリスク回避性向・後悔回避性向、加えて親からの影響を推定するための 5 件法の質問を計 27 項目問う。

分析結果

アンケート調査を基に分析を行った結果、「リスク回避性向は親から子へ継承されやすいが、後悔回避性向は継承されにくい」という仮説は支持されなかった。

考察・結論

結果より、親から子へ伝達される度合いは同程度であり、実際に差がない可能性が示唆される。また、親の主観的後悔指標が、回答者の主観的リスクに影響を与えたり、逆に親の主観的リスク指標が回答者に影響を与えたりする相関は見られなかった。このことから、リスクと後悔は、それぞれ独立に親から子へ伝達されるという、本研究の基本前提自体は成り立っているが、それらはどちらも同程度に伝達されている可能性が示唆された。